

経堂聖書会の皆さま

いつになく寂しい5月の連休でしたが、木々は若葉を輝かせ、新型コロナ感染など「どこ吹く風」といった風情です。今回も植物の話題を続けさせていただきます。

猫の額ほどのわが家の庭ですが、クロッカスをはじめ、三月の末から一斉に咲き出した草花も一段落。花壇の隅に真っ赤に咲く石竹（セキチク）と庭にひろがった紫の「十二単衣」を残すばかりになりました。

石竹は中国原産の撫子（なでしこ）だそうです。私の印象に残る撫子は、夏の浅間高原で、背の高い鬼ユリがオレンジ色の花を咲かせる草むらの足もとに、頼りなさそうに咲く薄桃色の花でした。小学生のころの思い出です。「大和撫子」という言葉がいつから使われるようになったのか知りませんが、いまでは、それが女性サッカー日本代表チーム名「なでしこジャパン」にさま変わりしました。



「十二単衣」のほうは、15年ほど前にお隣さんから頂戴したものです。園芸種にはみえなかったもので、鉢から庭に直植えにしましたら、蔓でひろがりました（写真左）。何年もその名を知らずにいましたが、ある方から「十二単衣」という素敵な名を教えられました。さらに、数年前、「十二単衣」の原種とおぼしき白い草花を、キンランとギンランの咲く近くの林で見つけました（写真右）。



そのほかにも、狭い庭には頂戴した草木がいくつか育っています。その一つは、もう20年ほど前、クリスマスにゼミの学生から贈られた小さな葉の終（ひいらぎ）。頂戴したのは赤いリボンと鈴のついた小さな鉢植えでしたが、玄関先の煉瓦のボックスにおろしたら、根づきました。もっとも、20年ほどの間に、赤い実をつけてくれたのはたった一度だけ。ところがです、触ると痛かった棘のある葉は、しばらく前から、棘のない丸い葉に変わりました。齢とともに棘がとれ、丸くなるのは人間だけではないようです。「バビロン望郷歌」（詩137篇4）の冒頭で豎琴を掛けたという「柳」（ユーフラテス・ポプラ）なども、若い時の細い葉が成長するにしたがって幅広の葉に変わるのだそうです。

日の当たる軒下には、還暦を迎えたときに学生たちから贈られた二本のオリ

リーブが植わっています。海外に出た年、庭木を剪定してくださった方が、その一本を根元からそっくり伐り取ってしまいました。しかし、オリーブは強い木です。翌年には、その根元から新しい芽を出しました。しかし、一向に、実をつける様子はみせてくれません。

切り株から芽吹くオリーブの若枝はイスラエルでも目にしました。そこから、「エッサイの株から萌え出る若枝」というイザヤの預言（イザヤ 11:1）はオリーブを念頭においている、と確信するようになりました。

一昨年暮、ヨブ記と一緒に学ぶ方が「珍しいから」といってくださった「エンドウの苗」の二代目が今年も実をつけました。今年は「豆ご飯」がいただけるかもしれません。「珍しい」とは、紫色の莢（さや）が混じるだけではなく、これが「ツタンカーメンの豆」と呼ばれる種類であることです。



黄金のマスクで有名なツタンカーメン（前 14 世紀）の墓は、1920 年代、英国の考古学者 H・カーターによって発見され、調査されました。報告書は、しかし、「エンドウ豆」に一言も触れていません。したがって、「ツタンカーメンの豆」がツタンカーメンの墓からじっさいに発見された豆の末裔ということではなさそうです。もっとも、植物の種子が、条件によっては、発芽しないまま長い期間を「休眠」することはよく知られています。「大賀ハス」を思い起こされる方もおられましょう。内村鑑三のもとで聖書を学び、信仰を培った大賀一郎博士は、弥生時代かそれ以前の遺跡で発見されたハスの実を発芽させ、花を咲かせてみせたのです。この「種子休眠」と発芽はパウロのいう「眠り」と「復活」（テサロニケ 4:13 以下）を示しているかのようです。

植物は、季節を忘れることなく、花を咲かせ、実をならせます。芽を出し、葉を茂らせます。植物によって地上の動物は生かされています。肉食動物といっても、草食動物がいなければ生きてゆけません。聖書の天地創造物語に、神は地上にまず草木を生えさせ（三日目）、最後に創造する人間を含む動物たちには青草が食物として与えられた（六日目）、と記されますが、この物語を伝えた信仰者たちは、地上の生き物たちは草木によって生かされているという事実を洞察していたにちがいません。

イエスもまた、マタイ福音書 6:28 で、草花をよく見なさい、と教えられました。ごく最近の共同訳聖書（新共同訳でなく）はここで「よく見なさい」と訳される動詞を「よく学びなさい」と訳しました。とてもよい訳だと思います。根

拠もしっかりしています。といいますのも、ここに用いられるギリシア語はカタマンタノー (katamanthánō) という動詞ですが、カタは「よく見なさい」の「よく」にあたり、マンタノーは70人訳聖書において、ヘブライ語の「学ぶ」を意味する動詞ラーマドに充てられたギリシア語だったからです(申命記4:10他多数)。イエスもまた、私たちが草花から学ぶことを教えておられたのですね。

植物は動物のように自由には動けません。しかし、それぞれに花を咲かせ、葉をひろげ、神を讚美しているかのようです。なかでも樹木は、同じ場所で、風雪に耐えながら、少しずつ成長してゆきます。先年、他界された心理学者・河合隼雄先生が「木はえらい」と書かれていたことを思い出します。

最後に、二、三のご報告です。

第一は、野呂有子先生が、成美堂書店の協力と小島拓人さんのサポートを得て、ミルトン『楽園の喪失』の新井明対訳電子版を完成してくださいました。

▼電子ブックページ

<http://milton-noro-lewis.com/digitalbook.html>

▼電子ブック

<http://milton-noro-lewis.com/ac/JohnMiltonParadiseLostversus/?detailFlg=0>

です。但し、コピペ、印刷は不可とのこと。

第二は、山中とも子さんが、宣伝のためにと配達された産経新聞の「朝晴れエッセー」欄に応募され、採用されました。昨年12月、聖書会の感謝会でお話くださったお話をまとめられた、「真心は通じる」と題する文章です。4月26日の朝刊一面に掲載されました。

第三は、新型コロナウイルス感染でマスク着用がいわれ、マスク不足が報じられますが、当方、阿部光成さんを通して、沖縄の石原艶子さんから、辺野古基地反対の声を上げておられる方々への激励として送られたマスクを一つ送っていただきました。安城市の鳥居祝子さんも、手作りのマスクを何枚もお届けくださいました。散歩にマスクはしませんが、都心に出なければならないとき、近くのスーパーマーケットに買い物に行くときなどに、しっかり着用するように妻友子から命じられていますので、大いに助かりました。感謝です。

(2020年5月11日記)